

文章表現指導におけるコンピュータの活用 —文章の構成力の育成をめあてとした実践の検討をとおして—

上田 祐二

1. 国語科の文章表現指導におけるコンピュータ活用の観点

2002年6月に文部科学省は『情報教育の実践と学校の情報化—新「情報教育に関する手引」—』において、教育の情報化について具体的な指針を示した。そこでは、教育の情報化の目的は、

(1) 子どもたちの情報活用能力の育成、すなわち体系的な「情報教育」の実施

(2) 各教科などの目標を達成する際に効果的に情報機器を活用すること^{注1}

に集約されている。この目的に照らせば、情報機器をいかに利用していくかということは、授業における、学習者自身の情報活用手段として、もう一つは、授業者の「わかる授業」への改善手段として、という2つの視点から考えていくことができる。

国語科においては特に(1)の情報活用能力育成の視点から、子どもの表現行為を支えるツールとしてどのように情報機器を活用するかということが課題となるが、その場合でも、これまで培ってきた情報の受容・生産の仕方ないしは授業のやり方を、情報機器を利用したものにとっくり置き換えてしまおうということではないのは、言うまでもない。この点は「新手引」においても、「大事なことは、機器の使い方を教える前に、まず、「使うべきか、使う必要がないか、その取捨選択の観点」を指導することである」^{注2}と指摘されており、多様なメディアの活用を視野に置きつつも、たしかなコミュニケーションの確立を第一に図ることが強調されている。このように、情報機器は情報活用手段の選択肢の一つであるという認識に立って、その場その場でより効率的かつ効果的な情報手段を取れる、懐の深い情報のやりとりへと高めていくというのが、情報活用能力育成の基本線であろう。

それでは、国語科においては情報活用能力と情報機器との関係はどのようにとらえられているだろうか。たとえば新潟県五泉小(1996)は、情報活用能力を

- ①. 情報を収集する能力 ②. 情報を分類する能力 ③. 情報を創る能力
④. 情報を伝える能力 ⑤. 情報を保存する能力

の5つの能力としてとらえ、小学校における系統表を作成している。^{注3}

また唐崎雅行(1998)は、情報活用能力の内実を

【情報処理能力】

収集する力・読み取る力・まとめる力

【情報処理能力】

つくる力・発信する力

といった構造としてとらえ、それぞれの力が課題解決の過程でどのように働くのかを整理して

いる。^{注4}

これらの研究では、情報活用能力の育成における情報機器の活用の局面は、情報収集と情報発信の段階に関わってくると考えられている。新潟県五泉小では、

- ・メディアから、目的に応じ必要な情報を得ることができる(①・5年)
- ・メディアから、目的に応じ必要な情報を的確に得ることができる(①・6年)
- ・集めた情報に自分の考えを付け加え、OHPなどを使い的確に発表することができる(④・4年)
- ・各種メディアを使い情報発信することができる(④・5年)
- ・多様なメディアを使い、豊かに情報発信することができる(④・6年)

というように、情報の収集と発信の局面で、情報機器の利用を明示している。また唐崎においても同様の局面で、情報機器が位置づけられている。

- ・課題にあったメディアや資料を選ぶ(収集する力)
- ・適切なメディアや方法を選び、活用する(発信する力)

このようにこれらの研究に共通して見られる情報活用能力と情報機器との関係は、情報のインプットとアウトプットの段階で情報機器をいかに選択的に利用させるかという発想である。

しかしながら文章表現指導に限って言えば、このような局面でのみの活用では、情報機器の利点が活かされない場合がしばしばある。たとえば筆者の赴任している短期大学の学生を観察してみると、コンピュータをいつでも利用できる環境下での表現活動であっても、次のような振る舞いに気づくことができる。

- ①. インターネットで何かを調べても、それをすぐプリントアウトしようとする。
- ②. 下書きまでの一連の仕事を紙上で行い、ワープロは、原稿の清書のためだけに使用する。
- ③. 話し合いや構想の際、気づきやアイデアをメモすることがない。また、メモを取ってもそれはルーズリーフのあちこちに書き散らかしているだけであって、再利用しやすい形で整理・保管していない。

①は、たしかに情報収集の局面において、コンピュータを活用しているように見える。しかし、それはたんに収集する情報媒体がインターネットであったというだけで、それを印刷(=コピー)した瞬間、その情報の扱いは、印刷媒体のそれと変わらなくなる。そのため、電子情報の持つ検索や複製上の利点が、その情報を活用する表現活動において活かされない。また、②のようなコンピュータの利用の仕方は、学生にとってはたんに課題の提出条件であるだけの余計な作業でしかない。

このようにコンピュータの場合、その利用が文章構成過程の外側にしかないならば、そこでの活用法は、せいぜいブラウザやワープロなどのソフトの操作法といった旧来のコンピュータ・リテラシーであって、国語科としてことさらに取り立てるべきことはそれほど多くない。しかし逆に、文章構成過程の内部にコンピュータの活用場面を設けていくなれば、たとえば③のような表現行為の問題点は、コンピュータのような情報整理の効率的な手段を備えた機器を利用す

ることによって克服されるということも期待できる。

もちろん情報収集や情報発信の段階での情報機器の利用も、情報収集の質を高めたり、表現活動のゴールとして動機づけたり、あるいは交流のための手段にしたりというように、表現活動の成立と活性化のために有効に働くことは否定しない。しかしながら、特にコンピュータのような情報機器は、たんに教育機器としてだけではなく、学習者自身の表現ツール(=文房具)としての活用が望まれるものでもある。それならば、国語科における情報機器、特にコンピュータの活用は、コンピュータを学習者自身の文章構成過程にいかにして位置づけていくことができるのか、そしてその場合、従来からの、紙上で行っていた文章構成の指導をどのように生かしながら、コンピュータによる文章構成の指導が行えるのか、という観点から考えていくことが必要であろう。

2. コンピュータによる文章構成のメリット・デメリット

ところでこのような観点から、文章表現指導において、コンピュータの編集機能を生かして文章構成の組み替えや文章の推敲に活用しようとする実践や提言もなされてきている。^{注5}しかしながらそのわりには、そうした活用が定着しているともいえない状況であるのは、なぜなのだろうか。

実際の授業でコンピュータを導入しにくい要因はいくつかあるが、その一つに、指摘されているほどにはコンピュータの機能が文章表現過程において有効に働かないということがあげられる。たとえばある表現課題のもとで情報収集を行った場合、書誌情報であれば、役立ちそうだと思う箇所を書き出したり付箋を貼るなどの方法で蓄積するのが一般的なやり方と思われる。このようなやり方では、収集した情報を活用しやすくするために、検索された状態で情報を保存するという工夫をしている。それに対して電子情報の場合、保存に際してあらかじめ検索しておく必要はない。活用のしやすさの点から、検索が効率よく行えるようにキーワードを補って保存しておくという程度の加工でじゅうぶんである。しかもコピーが容易に行えるので、インターネット上の情報もたやすく保管することができる。その点では、手書きで書き写したりコピー機で複製しなければならない書誌情報は、情報の抽出・保管に手間がかかる。

しかしながら、収集した情報をもとに表現の構想を立てる段階になると、電子情報の取り扱いでは、紙上の情報の取り扱いでは容易であることが逆に制約となる。特に収集した情報を俯瞰しにくいということは、コンピュータを使って表現の構想を行う場合に、工夫が求められる点であろう。たとえばカードを利用した文章構成法においては、カードに記録されたばらばらの情報をまとめたり関係づけながら、表現の流れが構想できるという利点がある。ところがコンピュータの場合、モニタの解像度の制約のために、収集した情報を俯瞰することが通常のままでは難しい。ファイルにコピーされたばらばらの情報を点検することも、それらに関係を見いだしてまとめていくのも、スクロールによって行ったり来たりしながらの煩雑な作業となる。

このように、情報の収集段階と表現の構想段階とで、紙上とコンピュータ上とでの作業効率

が逆転する点に、文章構成におけるコンピュータの使いにくさがある。もちろん、収集した電子情報をプリントアウトして構想段階で活用するという方法もあってよい。しかし、情報の保管・検索の点で電子情報が有利であることを考えれば、収集した情報量が多くなればそれだけ、電子情報の形態で情報を保管し、それをそのままコンピュータ上で処理できる方が効率的な表現活動が行えるだろう。

3. 文章の構成段階におけるコンピュータ活用の試み

そこで文章の構成段階でのデメリットを軽減できるようなやり方で、文章表現指導にコンピュータを活用することを試みた。すでにこの種の文章構成支援のソフトウェアには、アウトラインプロセッサや、ワープロソフト(本学の場合「Microsoft Word」)のアウトライン機能がある。しかしながら、それらのソフトウェアは、頭の中の発想をすばやく書き留めて、それらに流れを見いだすのには使い勝手がよいが、収集した情報群から表現の構想を行うときには、やはりスクロールの煩雑さから逃れられない。そこで、そうしたソフトウェアに頼らない方法で文章構成の手続きを考え、以下のような展開で授業を行なった。

なお、この実践での情報の取り扱い方は、KJ法^{注6}にヒントを得ている。第1時～第2時における情報収集で記録した内容とファイル名との関係は、KJ法における記録内容と一行見出しに対応しており、第3時におけるフォルダにまとめる作業は、紙片のグルーピングに対応している。

3.1. 実践 I の概要

授業科目：2001 年度「情報活用技術」(本学言語文化学科・1 年次後期)
表現課題：インターネットで調べたことをまとめてレポートする。

第 1 時～第 2 時：調査課題を設定し、それに関する情報をインターネットから収集する。

調査するための課題には、朝日新聞の「先生教えて」で取り上げられていた以下のようなテーマを 10 数項目列挙し、その中から 1 つを選ばせた。

- ・台風はなぜ夏から秋にかけて多くなるの？
- ・富士山って噴火するの？
- ・私たちの住んでいる地球は、どうやってできたの？
- ・ノーベル賞ってどういう人がもらえるの？
- ・テレビの視聴率って何？どうやって調べるの？

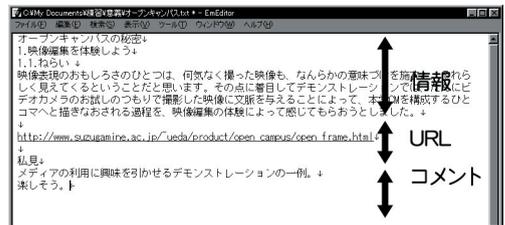
これらは、時事的な話題でかつ子ども向けのやわらかいテーマの立て方がされているため、調査の方針が立てやすく、インターネット上の情報量も多いという予想にもとづいて設定した。

ただし実際の新聞記事は、ののちゃんと藤原先生との会話形式で書かれているため、レポート形式でまとめるという今回の表現課題の例として提示できなかった。そのため、レポート形式で解説している「ののちゃんの自由研究」の記事を示して、完成させる文章形式をイメージさせた。

インターネットを利用した情報収集の方法については、YAHOO や GOO などの検索エンジンを利用して、キーワード検索をするやり方(キーワードの選び方や絞り込みなど)を説明した。

さらに収集した情報は、エディターまたは Word 【図表 1】

にコピーして保存させた。その際、【図表 1】のように、コピーした情報・情報源の URL・収集時の気づきの 3 点を 1 つのファイルに記入するように指示した。つまり、カードによる収集法に準じて、1 情報 1 ファイルというまとまりで、細かく記録させたのである。



ファイルの保存にあたっては、ファイルの内容がわかるような名称をファイル名にするように助言した。

第3時：取材した情報を分類する。

まず、1 情報 1 ファイルで保存させたファイルをすべて開かせて、デスクトップ上で分類させた。イメージとしては、【図表 2】のようにカードの分類に似た作業をデスクトップ上で実現しようとしたのである。

Windows98 の場合、それぞれのファイル・ウィンドウにツールバーやメニューなどがついていている。できるだけファイルの内容の表示領域を確保するために、ツールバーの非表示など、Word の設定を変更して作業をさせた。また、操作手順は筆者の Web ページを用いて提示しているが、授業ではそれに加えて、学生の収集したファイルを用いて、実際に分類操作をやって見せた。

【図表 2】

次に、分類したそれぞれの情報のグループを、1 つのフォルダにまとめさせた。ここでもフォルダ名をどういう情報のグループなのかがわかるような名称にすることを促した。



第 4 時：分類した情報を利用しながら、レポートの構成を組み立てる。

ここではまず、フォルダ・レベルの見出しを手がかりにしながら、デスクトップ上でフォルダを文章の展開にしたがって並べさせることによって、レポートの構成を組み立てさせた(【図表 3】)。

次にその順序にしたがって、フォルダの名称と、そのフォルダ内のファイルの内容を、Word にすべてコピーさせた。このとき、Word のアウトライン表示を利用して、見出しとファイルの内容とが、レベルの違いで見分けられるように指示をした。

さらにアウトラインに展開した情報から、説明に利用できるものをカラーリングさせることによって、コピーしたファイルの内容を吟味し、それらの情報を使ってレポートを書かせた(【図表 4】)。

以下、実践の成果と問題点について述べる。

3.2. 電子情報の性質をふまえた情報収集

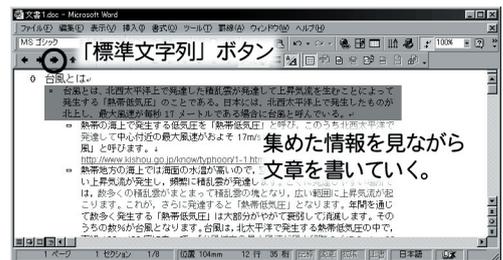
第 2 時まで学生が収集したサイトの数は、かなり個人差があるが平均すると 8.6(異なり数)であった(【図表 5】)。また、1 フォルダあたりの取材数の平均(「ファイル/フォルダ」)も 2.2 であり、情報収集において複数の情報源にあたるということは、ある程度、達成されている。

しかしながら、あまり多くのサイトを見ることのできなかつた学生(S11・S12・S14・S17)であっても、それが必ずしも収集活動を精力的に行わなかつたということを表しているわけではない。というのも彼らは、他の学生に比べて、1 つのサイトから複

【図表 3】



【図表 4】



【図表 5】

学生	フォルダ数	ファイル数	URL 数 (異なり)	URL 数 (延べ)	ファイル / フォルダ	字数 / ファイル
S11	5	13	6	13	2.6	607.0
S12	9	13	5	13	1.4	817.0
S13	8	19	17(3)	33(3)	2.4	1203.5
S14	3	15	2	15	5.0	791.2
S15	5	17	12(1)	17(1)	3.4	1591.6
S16	7	7	8	8	1.0	1220.5
S17	4	5	1	5	1.3	420.0
S18	7	20	18	20	2.9	631.8
平均	6	13.6	8.6	15.5	2.2	950.3

※フォルダ数について、フォルダに入っていないファイルは単独のフォルダとみなしてカウントした。
URL 数について、かっこ内の数字は、合計数のうち、URL が不明だった箇所の数を示す。

数の情報のまとまりを抜き出している(「URL 数(延べ)/URL 数(異なり)」の数値が高い)。しかもそれらの学生は、1 ファイルあたりの字数も少ない。このことは、情報収集の過程である程度の情報の吟味をしており、その中で情報のまとまりを意識的に発見しようとしていることの表れであり、それゆえ 1 ファイルの記録の処理に時間がかかり、結果的に収集量が少なくなったのだと考えられる。

逆に、収集したファイル数は多くても、S13 のように 1 ファイルあたりの字数が極端に多くなっている学生の場合、1 ファイル 1 情報という指示が守られないで、1 ファイルに複数のサイトからの情報をコピーしてしまっていたり、ページ全体を選択してそのまま貼り付けているために、字数が多くなっている(【図表 6】)。このように収集量の多い学生は、検索でヒットしたサイトの情報を片っ端から安易に集めただけであって、むしろ授業の理解度は低いと言ってよい。

1 ファイル 1 情報という作業の指示が徹底しないと、その後のフォルダ分けが有効な作業にならなくなる。このような点から、コンピュータを利用する上では、その操作法が文章構成法とどのような関係にあるのかということをよく理解させておくことが必要である。また、ページ全体を記録することも電子情報の場合あまり意味を持たない。なぜなら URL を記録しておけば、いつでも元の情報を参照可能だからである。したがってここでは、要点を記録させるなり、ポイントを絞ってコピーさせるなりの記録の取り方の指導をより意識的に加えておけば、このような使いにくい情報の蓄積は避けられたと思われる。

しかし、こうした問題点が生じた要因には、電子情報の手軽さも関係している。コピー・アンド・ペーストによる操作の容易さは、ともすれば安易な記録を助長してしまう。その点では、こうした収集活動を紙上で行わせる場合、カードやポスト・イットなどの物理的なスペースが、学習者に自然に工夫を促している点で指導は行ないやすいとも言える。ともあれ、コンピュータを用いるにせよ紙を用いるにせよ、活用するメディアの特性をふまえて指導ポイントを設定することが、こうした活動をたしかなものにするためには重要となる。

3.3. 情報を俯瞰しやすい表示の仕方

第 3 時で学生は、収集したファイルの話題の類似性に着目しながら、フォルダに分類するこ

【図表 6】 S13 の取材の内容

フォルダ名	ファイル名	URL 数	文字数
富士山 地震	富士山 地震.txt	2	1919
	富士山 低周波地震.txt	1	494
	富士山の火山活動.txt	1	958
活火山	活火山とは.txt	4	2578
	活火山の定義.txt	5	2828
	活火山の分布 日本.txt	1	288
富士山について	富士山 誕生.txt	1	336
	富士山.txt	1	417
	富士山について.txt	1	694
火山としての富士山	火山としての富士山.txt	1	722
	富士山 火山.txt	1	616
	富士山 活火山.txt	5	2026
富士山 噴火史	噴火の歴史.txt	2	921
	噴火史.txt	1	510
	富士山の噴火史.txt	2	1602
富士山 国と県の対策	富士山 ハザード.txt	1	537
	富士山 国と県の対策.txt	1	968
専門用語 火山	専門用語 火山.txt	1	3872
富士山の名前の由来	富士山 名前の由来.txt	1	581

とになる。ファイルのウィンドウをカードに見【図表 7】

立てていたため、授業ではファイルを全部開かせて、その内容を確認しながら分類させるという方法をとった。

しかしながら、1 ファイルの情報量が多いほど、そのファイルの内容を把握するのに手間がかかり、作業が能率よく行なえない様子が見られた。学生のまとめたものを見ると、ファイル名のレベルで類似性が深く、それにしたがってフォルダ名もそれらをまとめる用語で設定されている(【図表 7】)。その結果から見ると、むしろここでは、ファイル名を手がかりにフォルダにまとめさせた方が、情報の全体を見渡すという点でも取り組みやすかったと思われる。

構成順序	フォルダ名	ファイル名
1	地球の誕生 ←	地球の誕生.doc
		地球の最初.txt
		地球の始まり.doc
		地球の誕生と人間の歴史1.doc
		地球の誕生の真相.txt
		地球誕生4～隕1.doc
		地球誕生から人類誕生まで.doc
		地球誕生のパラダイム.doc
2	生誕の真実 ←	地球誕生のナゾ.doc
3	地球の物質 ←	原始地球.doc
		地球.doc
		地球のクレーター.doc
		地球の温度について.txt
		地球博物館目次.doc
4	年代の区分 ←	地質年代の区分.doc
5	地球の未来 ←	地球について.txt

3.4. 情報の再構成における元情報の構成からの影響

第 4 時のフォルダの順序を並べかえるという作業では、それによって学生自身の文章を構想させようということをおこなった。しかしながら取材元の情報の構成と構想した文章の構成の関係を見ると、かならずしも情報を再構成して自分の文章の構成を新たに構築するという活動にはなっていない。殊に少ないサイトから情報収集を行った学生に顕著だが、取材元のサイト構成が、そのまま文章の構成になってしまう傾向が見られた。例えば S14 と S17 は、「テレビの視聴率って何? どうやって調べるの?」という同じテーマに取り組んでいるが、ともにビデオ・リサーチ社のサイトから取材を行っている。【図表 8】に見るように、両者の構成はほぼ一致しており、それはビデオ・リサーチ社の構成に準じている。^{注7} これらの学生の場合、ひとまとまりに組み立てられているサイトの情報を、細切れにファイルに記録し、それをまた再構成によって復元するという活動になってしまっている。

こうした活動に陥った要因はいくつか考えられる。1 つは、取材にあたったサイトの構造自体が、ひとまとまりの説明の流れを持っているという点である。収集した情報を読み返すことで、文章の構成がその流れに引きずられたのである。2 つめは、そもそも学生の側に、選択したテーマを何のために誰に説明するのかといった表現の目的がじゅうぶんに意識化されていないために、説明すべき事柄が絞りがきれていないということが考えられる。S14・S17 が取り上げた視聴率の例で言えば、たとえば視聴率について読み手がどのようなことを知らなくて、どのようなことを知りたいかを予想させるなどの手だてが、伝えたい情報の焦点化とその展開を生み出させるためには必要であったと思われる。3 つめは、作業の方法の問題である。授業では、かならずしもすべてのフォルダを並べる必要はないということは助言していたが、学生はでき

【図表 8】

S14				S17			
構成 順序	フォルダ名	ファイル名	URL	URL	ファイル名	フォルダ名	構成 順序
1	視聴率って何？	はじめに	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/index.html	=	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/index.html	はじめに・・・	視聴率とは(はじめに...)
		視聴率ってなに？	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q1.html	=	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q1.html	テレビ視聴率とは	
		用語	http://www.videor.co.jp/terms/sa.html				
					ファイルなし	視聴率の調査の仕方	2
2	謎	視聴率には誤差がある？	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q8.html	=	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q8.html	視聴率には誤差があるのか	視聴率の計算の仕方
		調査は全国やっている？	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q3.html				
		調査世帯はどれくらい？	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q4.html	=	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q4.html	調査世帯ほどのくらいか	日本全国の調査世帯
		どのように対象を選んでは？	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q5.html				
		調査の期間はどれくらい？	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q6.html				
		調査対象世帯は秘密なの？	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q7.html	=	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q7.html	調査対象世帯は秘密なの	
		どうやって計算してる？	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q9.html				
		PPMとは？	http://www.videor.co.jp/a_rate/ra_about/q10.html				

るだけ多くのフォルダを並べようとしていた。伝えたい情報の焦点化とその再構成のためには、フォルダの並べ替えというやり方は、収集した情報の枠内で発想することを強いるという側面も否定できない。むしろ情報のまとまり同士をつなぐ流れを何らかの形で補わせたり、逆に学生の説明の展開に、収集した情報を選択的に組み込んでいくなどの手続きを取るなどして、学生自身の文章の流れを構想することに力点を置く方がよかったと思われる。

3.5. 実践Ⅱの概要

前項で述べたように、実践Ⅰでは、収集した情報の再構成の面で、じゅうぶんな成果をあげることができなかつた。しかしそれはファイルとフォルダのアイコン操作という思考の方法にあるというよりも、取材元の情報構成に大きく影響を受けてしまい、書き手自身の文脈を生み出しにくいからではないかという疑問が残った。そこでこの方法の有効性を確かめるために、事前に表現することがらを明確にさせる活動を行った上で、これまでの方法で、それに関連する情報を収集するという活動を行わせてみた。

授業科目：2002 年度「文章表現演習Ⅰ」（本学教養学科・1 年次前期）
 表現課題：「電車内での携帯電話は禁止すべきか」について意見文を書く。

第 1 時～第 2 時：テーマについて、初発の意見文を書く。

第1時では、意見文の基本的な構成を提示して、「サッカー観戦と野球観戦、テレビで観るならどちらがいいか」について意見文を書かせている。

第2時では、携帯電話使用時のマナーや電磁波の危険性に関する新聞記事を Web 上で提示した。それを閲覧しながら、第1時の文章構成を踏まえて、意見をまとめるように指示した。

第3時～第4時：テーマについて、ネットニュースを利用して討論する。

事前の準備として、初発の意見でテーマについて賛成・反対のどちらの立場から書いているかにしたがって、学生がどちらの立場から議論するかをあらかじめ分けておいた。また、初発の意見文のいくつかをニュースグループにあらかじめ投稿しておき、それを討論のきっかけにした。

第3時は、おもにニュースグループへの投稿のしかたに注意させた。

第4時では、前時の討論内容を取り上げて、反論のしかたを整理した上で、引き続き討論を行わせた。

第5時：ニュースグループの発言を取材して、フォルダに分類・整理する。

実践Ⅰと同じ方法で、意見文の参考になる発言を取材し、それをフォルダに分類させた。実践Ⅱでは、テーマについてあらかじめ討論を行っている。討論の過程は、ニュースグループから確認することができるが、その性格上、さまざまな論点や意見がいくつかのスレッドに散在している状態にある。したがって、フォルダ分けによる取材・構想の作業は、それらの意見を整理し、自分の意見へとまとめていくという活動になる。

第6時：分類した情報を利用しながら、最終的な意見文の構成を組み立て、それにもとづいて意見文を書く。

ここでも実践Ⅰとほぼ同様の方法をとったが、フォルダの順序を考えさせるときに、必要に応じて空のフォルダを追加させて、意見の筋道が明確になるような流れに組み立てるよう助言した。

3.6. 取材内容からの影響

実践Ⅰにおいて、取材したものをまとめながら文章を組み立てていくという表現活動の場合、取材元の情報の構成に影響を受けやすくなるということを指摘した(3.4.)。文章の組み立てを構想する段階でのこのような影響は、構造化されていない断片的な情報を用いた実践Ⅱでは認められない。しかし実際に叙述されたものを見ると、取材元の情報に文章が依存してしまうも

のがやはり見られた。

S22は、フォルダの追加もなく、取材したフォルダを並べ替えるだけで文章を構成している。この学生の場合、取材した情報にカラーリングを施しながら、取材したものをできるだけ生かそうとする姿勢が見られた。しかしながらかえってそれが、文章の表現やそれぞれの項目間のつながりを分かりにくくさせている。

たとえば中ほどの展開部分の「3. なぜ必要なのか」では、「緊急時の携帯電話の使用がなぜ必要なのか」について書いている。しかしそれは取材した3つの発言を要約しつつつないただけである。そのため「緊急時の場合は、情報を知る・得るということで十分なのです。」のような、車内で連絡を受けてもすぐに行動が取れないことへの反論が、前後の文脈に合わないまま唐突に置かれてしまっている。

3. なぜ必要なのか

もし重要な事柄だったら相手は非常に困るし、何か間違ったことをしてしまうかもしれません。緊急時の場合は、情報を知る・得るということで十分なのです。それに連絡を受けたらすぐに次の行動を考えることができ、余分な時間をはぶく事ができるからです。自分の目的地へ着いた後に聞いていたのでは「手遅れになっていた」という場合があるかもしれないからです。

- ・「○○を今すぐ知らなければ困る」という要件でかけてくることがあると思います。その時に電話に出なかったら、相手は非常に困るし、何か間違ったことをしてしまうかもしれません。
- ・緊急時の場合は、情報を得る・知るってことで十分なんです。だから禁止にしないでほしい。
- ・連絡を受けたらすぐに次の駅で降りれるし、自分の目的地に着いてから留守電を聞いたのではすでに手遅れという場合もありえるのではないだろうか。(※下線部は、取材した情報に対してカラーリングが施されていた部分)

実は、叙述段階でのこのような傾向は、実践Ⅰにおいても見られた。しかし実践Ⅰの場合は、事項の説明を目的にした文章であったため、取材元の文章が、学生の文章にとって完成形のモデルになったのではないかと、そしてそのせいで学生の文章が取材元の文章の模倣・要約になりがちになったのではないかと考えられた。しかしながら実践Ⅱのように、ネットニュースのような断片的な発言の利用においてもこうした傾向が見られたということは、取材内容の活用そのものが、ともすれば取材元の情報に依存しがちになってしまう要因であるとも考えられる。

もしそうであるならば、たとえば、フォルダ項目の論理関係をつなぐことばを補わせて項目間のつながりをとらえさせたり、引用の表現形式を導入して学生自身の文脈を作らせるなどすることによって、取材した情報を吟味し、それらが自分の述べたいことにどう関係するのか、それらをどう利用できるのかを考えさせる場面を仕組んでいく必要があるだろう。

3.7. 構成の試行錯誤

S21は、フォルダ分けで組み立てた構成を、アウトライン上で叙述する段階で変更している(【図表9】)。フォルダ分けの構成からは、書き手と立場を異にする「携帯電話は迷惑だ」という意見を、「メール機能の活用」という解決策の提示によって反論した上で、携帯電話使用

容認の根拠として「緊急時の利便性」をあげる。続いてそれに対する「留守電機能の活用」・「電車からの降車」という反論を検討して結論づけるという筋道が見える。

それに対して実際の叙述では、「緊急時の利便性」という論点に絞りこんで意見を展開している。たしかに、フォルダ分けの構想では論点が2つあるせいで「緊急時」と「メール機能」との関係に触れにくくなっており、また、賛成側からの意見と反対側からの意見とが行ったり来たりする複雑な構成になっている。それがアウトラインでは、「自分の意見とその根拠」→「反論の検討」→「結語」という展開に整理されていることがわかる。またアウトラインを見ると、冒頭にあった「携帯電話は迷惑か」の項目を末尾に移動して叙述から除外されており、叙述の段階で、あらかじめ立てた組み立てを再検討しながら叙述したことがうかがえる。

これらのことから、実践Ⅰのような説明型の文章を書かせる場合よりも、実践Ⅱのように意見型の文章を書かせる場合の方が、文章構成の組み替えを活発に行なっていることがわかる。これは実践Ⅰのような文章のモデルがないために、取材した情報の関係を学生自身が見出していかなければならなかったためであると思われる。しかも1つ1つの情報の関係を個々に検討しているというよりは、フォルダないしはWordのアウトライン・レベルである程度のパッケージ化がなされた情報が単位となっていることが、項目間の論理関係の発見という作業を適当な複雑さにとどめている。このように、文章の全体像が見渡せ、しかも構成の組み替えが容易であるというコンピュータの環境が、文章の構成・展開を意識しながら書かせることに役立っている。

【図表9】 S21のフォルダ構成とアウトラインとの関係

フォルダ構成	アウトラインと作文
1. 携帯電話は迷惑か	3. 緊急時に 電車内での携帯電話について、使用すべきか・使用しないべきか、問題になっている。携帯電話が普及したこの世の中、携帯電話を使わないというのは無理である。例えば、大切な用件があった場合や緊急電話などがあった場合は、電話にでたいものだ。 緊急などの電話がかかかってきても車内にいれればすぐには行動できないのではないかという意見や電話にでるから緊急であることや仕事であることが分かるので携帯電話を使わなければ何の連絡かも知らなくてすむではないかという意見がある。 でも私は、電話がかかかってきてもすぐには行動できないかもしれないが、早く用件を知りたいものだ。後から電話の用件を聞き、あの時用件が分かっていたらよかったのになどと思うのは、できれば避けたいものだ。
2. メールはどうか	2. メールはどうか 携帯電話で喋るのが迷惑だと言う人がいるが、それならメールにすれば良いと私は思う。
3. 緊急時に	5. 電車から降りる 携帯電話を別に車内の中で使わなくても、電車から降りてすればいいと言う人もいる。でも、目的地まで急いで電車で移動している場合、電話がかかかってきたからといって電車から降りることが出来ない人もいる私は思う。
4. 留守電	4. 留守電 情報を知りたいだけなら留守電を使えばいいじゃないかと言う人がいる。それだとほんとに緊急なのに留守電だと、留守電があることに気づけなかった場合、その連絡を知ることが出来ないこともあると私は思う。 私の意見に対し、電車から降りた時、いつも留守電を確認すればいいと言う人もいる。が、何回も電車を乗り継ぐ人にとっては、大変なことだ。
5. 電車から降りる	5. 使用する いろいろな意見があったが、緊急の連絡の時も、早く用件を知りたいので携帯電話を使用すべきだと私は思う。
	携帯電話は迷惑か

3.8. 意見の深まりとその文章化

最後に、取材した情報を参照・参考にしながら、そして文章の構成を意識しながら文章表現を行うという今回の実践のねらいが達成されていると思われる例を取り上げる。

S23 は、第 2 時での初発の意見の段階では、マナーを守らない側の論理について、新聞記事に表れていた主張を「エゴイズム」だとみなし、それが横行する世の中では携帯電話の使用を禁止しても無駄だと簡単に切り捨てている。

電車内の携帯電話は、禁止すべきかということについて、私は、禁止はしなくていいと思う。そうなると、乗客ひとり一人の責任、あるいは、電車会社の取り組みが、今以上に求められてくるだろうが。

仮に、“電車内の携帯電話は禁止！！”とした場合、守る人というのは、極わずかであろうということが目に見えているからだ。

電磁波が、ペースメーカーを装着している人や、アレルギーの人にあたえる、影響はどんなものだと知っているながら、仕事の関係で切れない、メールが利用できない、緊急連絡ができないなど、自分のことをまず考えるという、エゴイズムが多すぎるこの世の中、この規制は、正に「焼け石に水」である。

このようなことを踏まえ、電車会社側も優先席や禁止の車両を設けるなどの対策をとり始めている。だからといって、この問題が解決した訳ではないが、これから、今以上に求められるのは、「互いに思いやる」という気持ちなのではないだろうか。つまり、電車内での携帯電話は、禁止しなくていいと考えるのだ。(下線は上田による)

しかし第二次の意見文では、討論からの取材を活用しながらその問題に切り込むことができている(【図表 10】)。たとえば、

確かに、あの狭い車内で大声で会話されると、とても迷惑です。しかも、それが“携帯電話”ともなると、降りてからすればいいじゃないかとも思います。しかし、携帯電話は喋るだけに使う物ではないではありません。大声でしゃべるのが迷惑なのであれば、メールにすればよいのです。しかし、そのメールでさえも、対応しがたいこともあります。それは、身内の不幸や、職場の緊急連絡といった、緊急事態の場合です。

のように、守れない状況を想定する筋道の説明に論理性を持たせたり、

そうなると、使用を禁止すべき立場の人に、「情報を得る・知るだけなら留守電でもいいじゃないか」と反論がきそうですが、留守電にした場合、留守電を聞くのは、下車した後ということになります。留守電の内容が不十分であったら、すぐに折り返し電話をすることで、会話することはできます。

しかし、緊急事態の場合、後から・・・では手遅れになってしまうのです。携帯電話は玩具ではない、電話のやり取りのためにあるのです。それを禁止することは携帯電話の意味がなくなってしまいます。

のように、導出した反論を検討することによって、守れない側の主張の妥当性を確かめていくことができているのは、この話題に関するさまざまな意見を取材し、それを参照しながら書いていくことの成果であると思われる。

また S23 は、取材内容をよく吟味しながら、自分の文脈に位置づけようとしていることがうかがえる。たとえば第 2 段落では、「もし電話で喋っている人以外にも、延々と長話をしていて迷惑な人達もいます。電話以外にもそのような人達も禁止するべきではないのでしょうか？」という問題について取材しているが、「緊急時の備え」という論点に焦点化するために、

【図表10】(箇条書きは、取材された情報。下線は上田による)

<p>必需品 「77%の若者が、携帯電話を利用している。」(内閣府調査6年前の8倍) 現代、若者に限らず、携帯電話を持っているという人がほとんどで、世間的に携帯電話が必需品となっています。このように、携帯電話が私たちの生活に浸透してきたのは、これに多くのメリットがあり、それが人々に認められたというところにあります。そのメリットというのは、電話をかけた時従来のように公衆電話をさがさなくていい、いつでも連絡ができる、小さくて持ち運びに便利、デザインがオシャレなど、個人にとっても様々です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今の携帯を持っている人がほとんどで、世間的に携帯が必需品となってしまっているから、車内だけ禁止しなくてもいいんじゃないかと思えます。 ・不快にさせない携帯電話が「どこでも使える」というのは誤解だと思えます。「使ってもよい場合に、すぐ使える」というふうにとらえるべきなのではないでしょうか。 <p>不快にさせないために しかし、最近では、この携帯電話をめぐる様々な問題も出てきています。その問題の一つ、「電車内での使用の禁止(電源を切る)」についてみていきたいと思います。電車内での使用を禁止すべき立場の人の意見の一つに、大声で喋るのが迷惑など、「不快に感じる」というのがあります。確かに、あの狭い車内で大声で会話されると、とても迷惑です。しかも、それが「携帯電話」ともなると、降りてからすればいいじゃないかとも思えます。しかし、携帯電話は喋るだけに使う物ではないではありません。大声でしゃべるのが迷惑なのであれば、メールにすればよいのです。しかし、そのメールでさえも、対応しがたいこともあります。それは、身内の不幸や、職場の緊急連絡といった、緊急事態の場合です。緊急事態というものは、いつなんどき誰の身に起こるかとは、予想が不可能です。車内で電源を切ってしまうと、その緊急事態を知ることができなくなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もしも携帯電話は喋るだけに使う物ではないので大声で喋るのが迷惑だと思えばメールをすればいいと思う。 ・大きい声だとうるさいけど長電話じゃなければ迷惑にもならないと思う。それにメールをすればみんなの迷惑にならないと思う。 ・もし電話で喋っている人以外にも、延々と長話しをしていて迷惑な人達もいます。電話以外にもそのような人達も禁止するべきではないのでしょうか？たしかに電車内は、長話をする迷惑な人たちもいて、かなりうるさい場所です。しかし、それは「お互いさま」なのでがまんできます。ところが、携帯電話の場合は、電話の相手は「電車の外」の人です。したがって、携帯電話を使用している人に対しては、わざわざ騒音を車内に持ち込んでいるという印象が強いのです。しかも相手は車外の人です。「お互いさま」の範囲の外の人間が車内を騒がしくしているのですから、それに対する不快感は車内の人同士が騒ぐ場合よりも大きいのです。 ・話し声が迷惑だからということだったら、携帯を持っている人であればお互いの状況なのではないでしょうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・携帯電話は玩具ではない。緊急などの電話のやり取りのためにあるのだ。それを禁止することは電話の意味がなくなってしまうのではないだろうか？ ・身内の不幸とか、職場の緊急事態の場合など。もしものときに備えてです。話し声が迷惑だからということだったら、携帯を持っている人であればお互いの状況なのではないでしょうか。 <p>留守電の使用 そうなると、使用を禁止すべき立場の人に、「情報を得る・知るだけなら留守電でもいいじゃないか」と反論がきそうですが、留守電にした場合、留守電を聞くのは、下車した後ということになります。留守電の内容が不十分であったら、すぐに折り返し電話をすることで、会話をすることはできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報を得る知るだけなら留守電でもいいんじゃないですか？ <p>手遅れ しかし、緊急事態の場合、後から・・・では手遅れになってしまいます。携帯電話は玩具ではない、電話のやり取りのためにあるのです。それを禁止することは携帯電話の意味がなくなってしまいます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・そんなときには、留守電を聞いた後に、相手に電話をかけてもらいたいと思います。 ・電車を降りないと緊急時の行動が取れないということは、認めてもらえたわけですね。だとすれば、緊急連絡をいつ受け取るかということだけが問題です。私の考えでは、どうせ行動が取れないわけですから、緊急連絡も、下車してから受け取ればいいと考えます。その手段として、留守番電話を活用すれば十分だと思います。 ・電車から降りたときにいつも留守電などを確認するようにしたらいいと思います。 ・留守電を聞くのは、下車した後ですから、留守電の内容が不十分であってもすぐに折り返し電話をすることで、会話をすることはできます。 ・たとえば生死にかかわるような緊急時については、我慢できるでしょうが、別の用事ができたので、待ち合わせ場所にいけないなどということも「緊急」であるというなら、我慢できませんが。 <p>不快であっても使うべき このように、あの狭い車内での携帯電話の使用は、周りの人に「不快に感じさせてしまう」という場合があるということは事実です。しかし、現代の社会、携帯電話と私たちの生活は、切っても切れない関係にあるといっても、過言ではありません。したがって、車内での携帯電話の使用は禁止しなくていいと思います。ただ、このような中で、私たちは、携帯電話を、「どこでも使える」ではなく、「使ってもよい場合に、すぐ使える」というふうにとらえるべきなのかもしれません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・携帯電話が「どこでも使える」というのは誤解だと思えます。「使ってもよい場合に、すぐ使える」というふうにとらえるべきなのではないでしょうか。
--	--

その議論は切り捨てている。逆に、第1段落で問題提起の枕に利用している「世間的に携帯が必需品となってしまっている」については、「77%の若者が、携帯電話を利用している。」(内閣府調査6年前の8倍)」という独自の取材を加えたりもしている。

さらにこうした情報の過不足の吟味に加えて、取材内容の自分の文脈への位置づけにも工夫が見られる。たとえば各段落の冒頭では、「しかし」→「そうなる」と、「しかし」→「このように」というように、前後の論理関係を明確にしながら書き進めている。また、第4段落では、第2段落「不快にさせないために」で取材した内容を、「後から・・・では手遅れになってしまう」ことの強調として利用している。

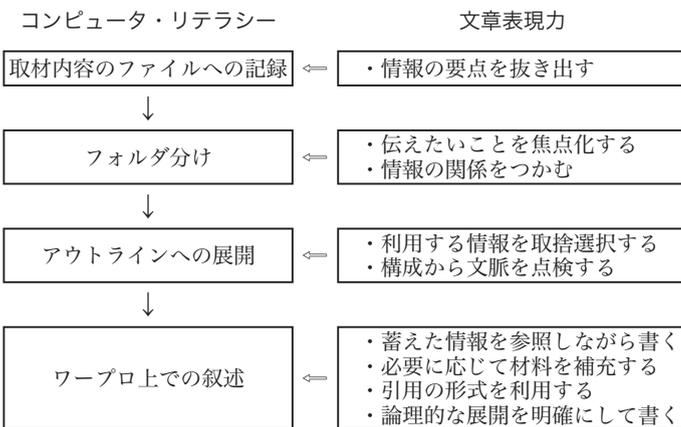
これらの点から、文脈を踏まえて収集した情報を活用しながら書くという作業にとって、取材内容・構成・下書きが統合的に俯瞰でき、さらに順序の入れ替えやコピーなどの加工の容易なコンピュータは有効に機能しうるとされる。そして、3.4や3.6で触れたような、書き手の意見を軸にして取材した情報を選択的に用いたり、フォルダ・レベルの項目間の論理関係を明確にするといった手続きがコンピュータの効果的な活用を支えるということも、S23の事例から見通すことができる。

4. おわりに

冒頭で情報機器を情報活用手段【図表11】

の選択肢の一つとしてとらえるという活用の視点について述べた。

しかしそれは、情報機器による手段とそうでない手段とが、まったく性格を異にするものであり、二者択一的な手段だということではない。本稿を通じて明らかにしたように、仮にコンピュータを利用して表現する場合であっても、「要点をとらえる」「伝えたいことを焦



点化する」「情報の論理関係を見いだす」など、これまで国語科でしばしば指導されてきたような表現力は、コンピュータの活用をより有効にするためにやはり必要になる(【図表11】)。したがってコンピュータを活用した授業を国語科において展開する場合に重要であるのは、従来のコンピュータを用いない授業からの連続性・発展性である。

実践Ⅱの後にかんたんなアンケートをとった。そこでS23は、この実践での文章表現法について次のような好意的な回答を寄せている。

コピー・文の入れ替えなど即座にできるから。今回はまだ初めてで理解するのに時間がかかってしまったけど、慣れたら、作業が効率よく進められると思う。

しかし S23 が比較的すぐれた表現を生み出したのは、すべてコンピュータのおかげというわけではない。アンケートの別の設問で、高校時代までの学習経験について尋ねたが、S23 は、文章の組み立てに関する指導を受けたと回答した数少ない学生の一人であった。「コピー・文の入れ替えなど」といった、S23 がすでに持っている文章の操作能力にコンピュータがうまく機能したのであって、そこには「慣れ」ることによってより高い表現力を発揮するための道具としてコンピュータが位置づく可能性がある。このようにこれまで学習者が身につけている表現技術の何を支援し、あるいはどこはやり方を変える必要があるのかを見極めながら活用していくことによって、コンピュータを学習者の表現力を支える道具として位置づけることができると思われるし、それでこそ国語科の授業において活用する意義も生まれてくるだろう。

注 1: 文部科学省(2002)『情報教育の実践と学校の情報化-新「情報教育に関する手引」-』、p.24

注 2: 文部科学省(2002) p.25-6

注 3: 新潟県五泉市立五泉小学校(1996)『情報活用能力を育てる授業』明治図書、p.17

注 4: 唐崎雅行(1998)『情報活用能力を育てる新単元学習』明治図書 p.11

注 5: たとえば、荻野勝(2002)「コンピュータの利用と教育」(全国大学国語教育学会『国語科教育学研究の成果と展望』) 明治図書、中村敦雄(2000)「ワードプロセッサを活用した文章表現学習から見えてきたこと」(日本国語教育学会『月刊国語教育研究』339)などを参照。

注 6: 川喜田二郎(1967)『発想法-創造性開発のために-』中公新書

注 7: ただし、ビデオ・リサーチ社のページ構成は、授業当時から変更されているため、実際にどのような構成であったかは確認できていない。ここでは、ファイルに記録されていた URL の順序から推定している。ただし、現在のビデオ・リサーチ社のサイト構成 (<http://www.videor.co.jp/rating/wh/contents.htm>) もここでの構成とさほど変わっていないことから見ても、当時も類似の構成は取っていたと思われる。